K

現代の文学＝18

伊藤整集

火の鳥
青春
伊藤整氏の生活と意見
詩抄

河出書房新社

現代の文学18　伊藤　整集

整

© 1965

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和40年12月1日　初版印刷
昭和40年12月8日　初版発行

定価　390円

著　　者　伊藤　整
発行者　河出朋久
印刷者　高橋武夫
装　　幀　原弘 (N.D.C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座　東京　10802

製本・岸田製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

火の鳥……三
青春……一五三
伊藤整氏の生活と意見……二八三
詩抄……四二九
年譜……四四五
解説……佐々木基一……四五二

挿画　田中田鶴子
写真　竹田正雄

伊藤整集

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

火の鳥

Phoenix——a fabulous bird, of golden and red plumage, which, according to a tale reported by Herodotus, came to Heliopolis every 500 years, on the death of his father, and there buried his body in the temple of the sun. According to another version, the phoenix, after living 500 years, built himself a funeral burning pile and died upon it. From his remains a fresh phoenix arose.

(The Oxford. Companion to English Literature.)

一　むしばめる花

一

子供の泣き声が耳に入って目が覚めた。眠りが足りないと思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうもないので、起きて鏡の前に坐ってみた。顔の皮膚は荒れていて、クリイムで拭っても汚れが残っている。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私には言い出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が帰ったときは大分冷えていた。姉は起きて寝巻のまま石炭をくべ出したが、タア子が泣き出した。

「いいのよ、お姉さん、私がする。タア子が泣いてる」と私は言った。私は子供の泣き声が我慢できない。私の中に、いつまでも癒着しない傷があって、そこに響くのだ。泣き声、子供の、赤ん坊の、人間の、猿の、あの泣き声が私には我慢ならない。あれが私にはたまらない。

「そう、じゃ沸かして入って下さいね。いやんなっちまうのよ。私がいないとすぐ目を覚ますんだから」姉はそう言ってガチャンと焚き口の蓋をしめ、冷たい廊下を出て行った。その細帯をした後姿を、私は、汚ならしい生き物を見るように見送った。女は四十すぎても子供を産

み、その子供のために、男への憎しみ怨みを忘れることができる。私は、女をそういうものとして証明して見せる姉をゆるすことができない。私は自分がきつい目をしているのが分った。私なら、と思った。

そして、私は姉の父とちがう私の父を、どうかすると自分ですら「外国人」と思いがちな父の姿をちらと浮ばせた。昨夜、私はそのまま風呂を焚くのをやめて、自分の室へ戻った。酒の酔いはさめ切っていず、私はあの、どうでもなるようになれという意識のなかで、それでも型を崩すまいとして服を脱ぎ、蒲団の中に滑り込んだ。寝巻は枕の横に畳まれたままだった。

何という顔だろう。眼の前にある拡大された自分の顔、それは世間で言う、あの三十女の顔なのだ。あるときは、とても汚ならしく、あるときは、女の命のさかりのように見える。私は西洋の女のように早く衰えが来るのかも知れない。私の肌はほとんど白壁のように白い。日本の女にも白い肌はある。それは、東洋人に共通の赤い濁りから抜け出した間違いのような白さで、たいてい美しい血の色を皮下に持っている。私のはそうでない。私のは、何かの色、白く塗られたような、白いのが汚れであるような白さだ。髪は黒に近いが、大分赤味を帯びている。私の肌は、少女時代、それから二十五歳頃までは、自分でもうっとりするように美しかった。私は何時間も鏡の前に坐って、見ていたものだった。上級生や友達が私を見る目つきで、私は自分を眺めた。まぶしいような、うっとりするような、神聖なものを見るような目つき。この私は美しいのだ。ああいう目つきをあの人たちにさせずにおかないぐらい美しいのだ。私は自分の美しさに、その頃は、酔っていた。暗い所では黒く見え、明るい所ではやや藍色に見え、どうかすると緑色に近くなる眼の色、目と目の間が少し離れているのが少女らしいあどけなさを作っていることも私は知っていた。その自分の顔を、私はあの黄色い、赤い、でなければ血の色の透いて見える白い皮膚と真黒い髪と眼を持った日本の少女たちが、西洋の物語りの美しい妖精にあこがれる目つきで見つめるのを感じていた。だけど、彼女たちは怖いもののように私の身辺に来なかった。私は美しかった。しかし私は誰のSにもならなかった。西洋人のメイドの生んだ子、いいえ、それではない。私の異質の美しさ自体があの人たちを近づけないのであった。私と愛の告白をし合ったり、身体の接触をし合うのはあの人たちにとって、怖ろしいことだった。

そして、それが私をやるせなくし、私の毎日を、演技的にした。私はそのときから芸をしていた。七つまで英語で暮していた私は、父が帰国して母と二人、いいえ、間もなく姉と三人で日本語で暮し、日本の学校や友達の

世界に入ったけれども、女学校に入ると英語は急速にうまくなった。初め、それを私は自分の赤い髪と同じように恥じ、隠そうとした。しかしその卒業頃、私は自分の美しさが人の目を引くようになると同時に、自分の生まれに対して自信を持った。女子大学に入り、私は積極的に自分を作って行った。日本が中国で戦争を始める少し前、あの女子大学には秘密な社会科学研究会もあり、定期的に外語劇大会が催されていた。私の容貌と語学とは、そういう雰囲気の中で目立った。私はロメオを、チルチルを演じた。いつも男役が私にまわった。背が高いとか、動作がはっきりしているとか言う口実で、私は主役を押しつけられた。そして学園生活でも、私はそういう役を持っていた。日本の家庭で、未来の同じような家庭の主婦になる鋳型にはめ込まれながら育って来た少女たちは、自分の意見、自分の一人立ちの心を持っていないのだ。何かにもたれ、絡まり、陰口を言う。私はそんな風に育たなかった。父が帰国してから呼び寄せた姉に向っては、母は「フミ子、そんな歩き方は」とか「フミ子、足袋のコハゼはどうしたんです」と言うように、自分の附属物としてやかましく言ったが、私に向っては、階級の違う人の預り子のように接した。父の記憶が、父の動作が、いつも、私の中に現れるという予期と怖れで母は私を見ていたにちがいない。父の記憶が、私を日本人に躾けることから母を妨げたのだった。私は母にかしずかれて育った。姉も次第にその母の調子を見習った。父からの毎月の送金はきちんと正金銀行に払い込まれていた。つまりそれは私の金だったのだ。戦争が近づき、為替相場が変ると、二十ポンドの金は日本の円で次第に多くなった。私は空白な成長の中で、母や十ちがいの姉や級友たちが作る窪み、遠慮、期待などの中へ自分を伸ばして行くより外なかった。英語の教師たちですら、私の発音の自然さに一目おいて、私を腫れもの扱いにした。私はその頃から、時々ヒステリックになった。私が手を伸ばすと、すっと相手が引っ込む。その空白な周囲の苛立たしさ。それは恐怖のように私を駆り立てた。私は自分の鋳型を、父を求めた。父に手紙を書くことは禁じられていた。私には一人の妹、二人の弟が、イギリスに居るということだった。私はある時ラムを読んで泣いた。それは、ちゃんとした家庭で、落ちぶれた好ましくない縁者が持てあまされる話だった。私は母にも言わない悲しみを持つようになった。私は姉に物をぶっつけ、何日も母に口を利かなかった。母はおろおろし、足音を忍ばせて家の中を歩いた。

私は学園であの秘密研究会に出た。黒い色の汚いカラアをつけた青年が階級構成の理論を説明し、五六人の学友が身体を固くして聞いていた。私はその帰りにもらっ

たパンフレットを何冊か読んだ。そしてそれっきり出なかった。「どうしたのよ、エミちゃん、もう出席しないの？」と、男のようないかつい顔と身体をした同級生の村井さんが、教室の窓の下の、乾いた下水の両側に脚を開いて、私に言った。村井さんですら、私に向っては顔を近寄せない。私がなにか触ってならない神聖な、また穢れたもののように。私は「うふッ」と含み笑いして、靴底でザクザクする下水溝の角をこすっていた。It can't mend my sole. と私はその時習っていた「ジュリアス・シィザア」の靴屋を引用したいところだった。地下運動の資金募集の話があったとき、私は村井さんに金をあげた。「これ、あなたにあげるのよ」と私は言った。とにかく私に秘密をうちあけるところまで近づいてくれた村井さんに、私はあなたが好きだけど、と、もう少しで言うところだった。私を学友と親しく結びつけたかも知れないたった一つの機会はそれで失われた。

その頃私に、いいえ、私の不幸に気づいたのは会話の教授にいらしていた尼さんのアーメンガアド先生だった。私に話しかけるとき、アーメンガアド先生の皺に蔽われた真蒼な大きな眼は、心持ち外の生徒へよりも長く注がれていた。私は私で、授業が終って桜の並木の下を、校門のあたりまで神経痛の脚を心持ち引きずるようにして歩いてゆく先生の黒い尼僧服の後姿を、じっと見送っていた。

でも私は先生の姿が見えなくなると、すぐスカートをなびかすようにして階段を駆け下り、校庭の隅にある劇研究室に行くのだった。私は花形だった。その頃絶頂にあった少女歌劇では、男役をする少女たちが花形だったように、女の学校ではロメオになりチルチルになる私が花形だったのだ。そして私はそのとおり振舞った。自分の美しさにこだわらないこと、確信ありげに振舞うこと、私にとっては学校が舞台だった。見られて生きること、内側のむなしさを逃れて、見える自分を作り、皮膚や表情や動作で生活すること、火花のようなものを絶えず身のまわりに作っていることが私の日常だった。いつか私はアーメンガアド先生に話しかけるかも知れない。すると私は別な私になるかも知れない、と私は思っていた。でも私はそういう自分にならないように一生懸命やらなければならないのだと思った。アーメンガアド先生とお話したりすれば、私は自分を失って泣き出すだろう。私はみなし児だ。私はどこにも生きる場所のない捨児なのだ。よしんば泣いて、あの先生の胸にすがったとしても、それが何だろう。アーメンガアド先生は私と同じじゃない。あの人だって心は向うにある。大海と大陸を隔てた、古い文明と古い都市と古い生活と、そして私がその一人ではない群集とに、あの人はつながっている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

二

そして今、それから十年あまり時がたって、私は、雀の囀っている窓の前で化粧を落した自分の顔を見ている。怖いもののように、内証で、私は自分に向い合う。なんという汚れだろう。きめに染み込んだ塵のようなものは、もう取れないのだ。あの黄色い、なめらかな皮膚には浸み込まないものを、私の皮膚は吸い取り、そして定着させてしまう。あの聖画に漂うような、金色に反映する美しい少女時代の私の皮膚は失われた。そして顔の形が、頬、顎、輪郭、目鼻立ちが、私をぞっとさせる荒地のように拡大されて鏡に写っている。モンゴリア型。目と目の間が離れ、頬骨が広く出ばっている東洋の顔が、私をおびやかす。ほら、ねえ、と言うように。母が亡くなってから、世帯の苦労をした揚句私の所へもどった姉を、私は母とそっくりだと思った。だが、私もそうなのだ。皮膚の輝きの失われた私の顔の型は、それはあの母の顔だった。そして次第に私はこの土地に結びつき、この東京に、日本の人間に混り込んで行くのが分る。だが私は気を取り直す。顔は役者の私にとっては、カンヴァスのようなものだ。なあに、という気持で、私はその恐怖をすっと跨いで越す。今私の前にある顔は、これはどうにでも使える。その上を一度塗れば、それは昔の少女の私以上の、どんな種類の美しさでも作り出せる。そして私は美しい、と自分に言いきかせる。自分がそう思い込んだ瞬間から、私の顔は美しく輝き出すような気がする。何という考えに私は慣れて来たのだろう。

扉を叩く音がして姉の顔がのぞいた。「ちょっと」と言って、音を立てずにカーペットをふんで来る。いつでも小声、猫のように、腰をかがめて歩く。もうタア子の昼寝の時間らしい。姉は小さな封筒の手紙を差し出して、「昨日いらしたんだけど、留守だと申し上げたら、手紙を書いて……」

私は聞きながら文字を見てはっとした。杉山の手だ。

「それで……」と私は姉を見る。

「何ともおっしゃらないで……昨夜忘れていたものだから」

「ええ、いいわ、ありがとう」

私が聞きたいのは杉山がどんな様子をしていたか、どんな表情だったかということだけれども、姉はそこまで私の方に立ち入らない。出て行く姉の後から、

「食事もうすぐするわ」と言って私は封を切る。事務所にも二度男の声で電話があったと言う。手帳を引き裂いた紙に「一度お目にかかりたいのです。面倒な話ではありません。吉良氏からも話して頂きたいと思います。また参ります」と書いてある。こちこちと固まった見てい

て苦しくなる文字だ。この文字の性格がすべてのああいう事の原因だった。何かぞっとするような、自分の内側にある厭わしい記憶が群らがって来る。網の一端を鈎にかけてしまうと全体がやがて水の中から上って来る時のように、つながって群らがって押しよせる。強い力で胸をしめつけられるような緊張が始まる。小劇場の文芸部室の乱雑な埃をかぶった棚や背の破れたソファや、母がやって来て玄関にたたずんでいた彼の下宿や、今と同じ字で書いた彼の売れない脚本の封筒にペタペタと貼った切手など。それから、犬が爪先でしがみつくように、「別れない理由はどうでもいいんだ。おれは別れないんだ」と言って、痩せた身体で畳に胡座をかいたまま、あらゆる筋肉を引きしめるようにしたあの人の顔が浮んで来る。

だが、それと重り合うようにあの田島先生が、学園の大きな硝子戸のはまった談話室で、腰かけた私たちの前に進んで来たときの黒いズボンの姿が現れる。英文助教授の岩井女史は子供のようにはにかんで紹介した。それを待っている間、四十歳近くに見えた田島先生は岩井女史の戸まどいも私たちの緊張も全体として静かな作法の中に受けとっていた。あの歩きかた、片足ずつ意識して前へ出す慎重な落ちつきは、日本人の紳士のいかめしさと違うものだった。私は遠くに、あの煙草の匂のような

もの、父が家の中を歩きまわった姿を思い出した。それからよく訪ねて来たマクカラアさんやマクカラア奥さんのカステラのような匂を。あの軟かい、他人にも自分にも均等に気を配る注意深さ。あれは翻訳ものの上演になると、私たちの仲間に欠けているものだった。土岐さんも笛子さんも、みんな自分にだけ集中してこちこちの日本人になる。後になって、それだと段々気のついたもの、それは父と田島先生に私が嗅ぎつけた共通のものだった。「私は先頃ヨーロッパの見学旅行から帰りましたので、向うの実験的な新しい演劇についてお話したいと思います……」ピネロウとダンセイニ、ピトエフ、ヴィュウ・コロンビエ、クレイグ、芸術座の話。純粋演劇と実験劇場。あの時のお話は、その後の薔薇座での稽古の間に絶えず聞かされた演技論と私の心の中で混り合っている。しかしあの黒いズボンの片足ずつを静かに伸ばすように前へ出た先生の最初の印象、あれが私を薔薇座に引き込んだ本当のキッカケだった。

そのあとで私たちは、一週間ほど前にすんだ外語劇のキャピュレット家の広間の場を立稽古の形でお目にかけた。ずいぶん恥しかった。セリフには自信があったが、研究会長の岩井女史があがってしまっていたので、それが皆に伝染した。田島先生は幕になると同時に「あなたは」と、私を指で差し、鋭い、はっとするようなきつい

眼で私を見て仰しゃった。地で行っていてかなり上手だ。だがそれは、言わばあなた自身の顔や身体の力を出しているだけです。ロメオは口実であるにすぎませんね。もっとも専門家の批評をしているのではありませんから、これは言いすぎですが、と。外の人たちには何も言わなかった。そのあとで奥家先生と岩井女史に讃辞を呈されたとのこと。そして、私のことを訊ねていたそうだ。そして私は卒業後、いやいや勤めていた女学校の英語教師に少し慣れた頃、突然田島先生のところへ呼び出されて、言わば夢中でアーニャをやらされ、その後でびっくりするような厳しい稽古と、俳優仲間の意地悪さと、嫉妬の渦の中へ投げ込まれた。私の生活はそうして始まったのだった。杉山とのことも……

食事していると、タア子ちゃんが硝子戸のかげからのぞく。両手で硝子を押している。「オバチャン、オバチャン、ウマウマ」と言う。泣き声でないタア子の舌足らずの言葉は、恥しいほど、私の気持をやさしくしてしまう。私は不機嫌から暴力で引っ張り出されてしまう。暴力、子供の暴力は何をでも踏み越える。機嫌よくしているときのタア子の顔をちらと見ると、何か泉のようなものが私の中から吹き出す。胸に灯がともったような気持になる。姉はタア子を遊ばせておいて、昨夜の風呂水で洗濯をしている気配だ。「いらっちゃい、いらっちゃい」と私は箸を持った手を上げて招く。そして立って行って硝子戸を開け、膝の上にのせ、箸でつまんで一緒に食べさせる。子供の可愛らしさと、子供の世界が私に思い出させる不安は、紙一重だ。その内部の、電球の内側のような小さな今の世界で、私はタア子と二人になる。その灯に私は心を暖め、頬ずりをするように、日向くさい黒いオカッパの髪の匂をかぐ。そこへ姉が入って来て、「あら、いいわねえ、タア子ちゃん」と手を肘まで赤くして何かを取りに室の方へ行く。すると、すっと私の小さな優しい心はかげる。私は不機嫌になる。タア子を膝にのせていたのを見つけられたことの恥しさが、腹立たしさに変る。その恥しさは、火花のように類を呼ぶ。

姉は杉山を知っている。あれがあの杉山だと分っていて黙っている。そして杉山の方がまた、姉に私とのことを何か話したかもしれないのだ。私はこんな無邪気な顔をしていられない筈なのだ。今朝はこんな風にしていていい日ではなかった。私は自分をゆるせなくなる。そうだ、こんな風にしていつも私の不安は始まるのだった。自分が仮りに、他人の眼にうつっただけの姿で破綻していなかったら、その姿のまま遊んでも笑ってもいいと思い込む。それを私は自分にゆるせない。姉がその場を赤い腕をむき出しにして用事ありげに通ったこと、そしてタア子を向けておけば私は機嫌がいいと自得した気配。

そんな風に見られている自分が私は嫌いだ。それだけで私は、自分に対しても姉に対しても、腹が立ってくる。私の世界は危くなる。私はやっと茶漬けにして食事を終え、タア子を、火薬が導火線を逃げるように、「ほら、あすこ、ハトポッポ、チッチッチッ」と言って室の外に出し、障子をピシャンと閉める。

室へ入って扉を閉めるとともにタア子の泣き声がする。私を追っている。こういう時、私は髪をかきむしりたい程その声におびえる。あっ、いけない、と思う間に、水を流す音や「いい子、タア子、すぐね、すぐね」と姉が声をかけているその気配と関係なく、その泣き声は、私に、子供を産むのをやめるためにあの病院で寝ていた一週間の苦しさを思い出させる。それは更に、さっきの杉山の手紙と引火し合う。私はその恐怖から逃げ出すように大急ぎで化粧する。目がしらに心持ち翳をつけること。頬はただ日本人らしい肌色に、むしろ目立たなくし、顎や首筋に白さを残すこと。ほとんど一刷毛でできる。私は持ちものを、机の引出しや、昨夜のハンドバッグなどから、かきまわすようにして揃え、火のついた家からのがれるように、姉の磨いておいてくれた靴をはいて逃げるように飛び出す。足早に歩き、角を曲ったところから、ゆっくりと自分に帰る。そしてやっと、私は一人いる安らかな心になれる。

垣根に沿って、小さな家々の門や踏み石や潜り戸などがある日本の生活の心づかいは私を苦しくする。どこも同じだ。戦時、私と母とは父からの送金が絶え、三年目四年目はひどく苦しい生活だった。そして杉山があんな芝居を企画したのだった。慰問興行という名目で、軍国主義の安芝居をうちながら、日本の各地、中国、台湾と歩きまわった。ひどい出しものだった。チェーホフもオニイルもいけなかった。私は肌を隠そうとして強いオークルを使い、髪を染めた。作りものの日本人になった自分の中に、私はいつも息をひそめ、あたりをうかがって生きていた。内地の農村の小駅の話。あれだけがよかった。落語家、漫才といつも一緒だった。東京へ戻ったとき四か月だと思っていたのに六か月だった。それでも杉山は強いた。お腹の中で動いていたのに。私はあのときの自分の顔が分る。絶えずあの命に向っている顔だった。でも私は同意した。そしてあの郊外の小さな病院で。そのあと、私は自分が生きていることの意味をなくしたような気がした。生活のため、と私は考えたくなかった。もっと生活が楽な時でも、私は子供はいらない筈だ。あの頃は、あの「芸術」という名をつけていた正体の逃げやすいものは、私の中で、戦争とイデオロギイと自分にかぶせた日本人の仮面のなかで、息も絶え絶えだった。犠牲がなければ存在も確かめられないようなかす

かなものだった。私は芸のために、魚にとっての水のようだったロシアやフランスやイギリスの翻訳劇は駆逐された。その中にひそんでいたあの人間らしいもの、私にとっては本当のヨーロッパよりももっと痛切な生きる場所だった、あの日本でもヨーロッパでもない翻訳劇への執着は、あの犠牲によって、私の中に生き残ったようなものだ。

恢復が思わしくないので一週間いたあの病院で、向いの室、隣の室で赤ん坊が生まれた。あの時から、私には赤ん坊の泣き声がたまらなくなった。あれは猿だ。どこか遠い原始林の奥で枝にぶらさがって、泣く。それは何か大きな動物に取って食われる。一匹が不吉に叫ぶ。猿の群は波のように枝をざわめかして逃げる。小さいのが逃げ遅れる。それは助からない。それは血を流し、内臓を食われる。まだそれでも泣いている。泣いている。毎晩私は同じ夢を見た。そしてどこかの室の赤子の泣き声に目が覚めた。恢復が十分でない、と医者のとめるのをきかずに、私は退院した。退院した日、私は、発作を起した。あんな脚本を書いて、そして私の赤ん坊を殺して、と私は杉山にしがみついてゆすぶった。身体が思うように動かないのに、私は一晩坐って、あの人も眠らせず、窓が白むまで泣いたり喋ったりしていた。

田島先生は私たちを棄てたように古典の翻訳に引きこもってしまった。でも座のものたちは生活しなければならなかった。そして脚本部員で演出助手だった杉山が軍国主義の自作の脚本で演出をし、監督をし、マネジャアをやり、軍部に交渉し、私たちを持ってまわったのだった。その生活の幹だった杉山が、私を残してまた慰問興行に出かけると、私は、どうしてもあの人と生活することはできない、と思いはじめた。あの舞台はいやだ。あの人はいやだ。旅先の杉山へそう言ってやり、私は母を呼び、母の家へ帰った。杉山は旅から戻ると、やって来て、どうしても別れない、別れる理由がない、と言い張った。しかしあの人の顔が私に思い出させた。あの晩の私の発作、病院の猿の夢、あっちの室、こっちの室で夜中に起るあのやるせない、動物のような、目あてのない、生きている、生きているという終りのない泣き声。私は父が残して行ったこの小さなイギリス風の館に閉じこもって暮したかった。あんな怖ろしい犠牲を払った上にまだ髪を黒く染め、肌をオークルでつぶさなければならないのか。私があの新しい演劇と結びついた頃に知り合って、あんなにも沢山の夢を託した元の美学科の大学生、あの杉山が、ああいう存在になったこと、そしてあの人との間に生まれる筈だった子があなったことは、あの人との生活を目あてに何年もの間私の心に育って来た衝動の全部でもって、逆に私をあの人から隔てた。あの人

をのがれることが、それが怖ろしいことのすべてからのがれることだった。

杉山は何度もやって来た。だが母は、いつも私が心を決めた時にそうしたように、私からあの人を押し隔ててしまった。私は軽井沢に疎開していた田島先生を訪ねた。田島先生も上京すると私を訪ねた。そして、三十歳になった私は、五十歳の田島先生と、はじめ学校で先生を見たときのイメージが熟して来た当然の帰結のように結びついてしまった。私が驚いたのは先生が子供のような人だったことだ。そのうちに空襲、平和、過労からの母の死、姉の夫婦別れ、そういうことは私には、あれに続いた一連の運命のようなものだった。どれも予期しないでいたことなのに、当然のことと思われた。だから戦後先生を中心にして劇団が再組織され、杉山は小説家になり、古い仲間の何人かは収入のよい大衆劇場や映画の引立役に走り、新しく若い人たちが加わったことも、またイギリスのマクカラアさんから、父の死と私のために年金が続けられている知らせをもらったことも、みんな初めからきまっていたことのような気がした。

三

私にとっては、自然なものは何もない。自然なもの、それはたまゆらの、不安定な約束だ。私の生活はあらゆる仮りの条件で支えられている。金、今の私は金に困らない。そのことは私は自分の悪徳のように思っている。私は姉にはぎりぎりの生活費だけ渡し、姉をあの世間の主婦たちと同じような、絶えず財布の金と買うものを睨み合せるような表情に追い込んでおく。物価が上ると少し増額する。姉の表情がゆるむと、私は渡す金を引きしめる。あんなに私たちを悪夢のように追いつめ、窒息させた軍人の政治だって、降伏してしまえばその実体は泡のようなものだった。田島先生の奥さんのことも私は気にかけない。あのしとやかな夫人のあのしとやかさは、何も働いていない空まわりなのだ。私の肌は荒れ、しみが出来、母の表情がいやらしく浮び出て来た。でも私の身体は均衡が取れ、美しい。素顔は本当の顔を作るためのカンヴァスであれば足りる。舞台では、私は昔と同じ夢見るような少女を作る、前よりも一層確かに、一層効果的に。

私の芸と、その日常の意識とは表と裏。「桜の園」も「ウィンダミア夫人の扇」も、私がいないと、薔薇座では舞台に穴があく。そして田島先生の演劇理論の体現者が私で、先輩大鳥さんよりも、薔薇座の力点となる女優は私だ、というのが、私についての定評だ。ヴェテランとか貴重な才能とか言う批評が私のために使われる。昔、私があんなに真直ぐな心で芸術を信じ、先生の言葉

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo